

氏 名	岩永 耕
博士の専攻分野の名称	博士（社会福祉学）
学位授与の日付	2016年 3月 19日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	独居高齢女性へのインフォーマルサポート形成要因 ～質的アプローチによる考察～
論文審査員	主査 教授 横山 奈緒枝 副査 教授 小川 芳徳 副査 教授 高橋 睦子 副査 教授 正野 知基 副査 教授 小野 ミツ（九州大学）

## 論文内容の要旨

### 1. 研究の背景と目的

#### (1) 研究の背景

独居高齢者世帯はこの30年足らずに3倍以上に増えたとされており、彼らの7%は会話の頻度が2週間に1回以下で将来に不安を感じる人が6割もいる。そのような中、なじみのある人間関係は安心感と信頼感を維持し、助け合いや互助を高めるとされ、在宅で暮らすには多様な社会資源をニーズに合わせて結び付けていく必要があるとの報告もある。先行研究を見ると、これまでに高齢者の社会関係について量的に調べたものは多いが、それでは結果を深く解釈することが困難であり現実の社会の中で複雑に関連している「要因」や「背景」を明らかにするには、質的研究の方が適しているという指摘もある。

#### (2) 研究の目的

女性は友人関係を引き出す文脈が豊富ではないかと考え、本研究では独居高齢者の中でも女性に着目し、彼女らとインフォーマルな他者との関係性の実態について調べ、質的手法によって彼女らが持つ「つながり」の要因や背景、経過を明らかにすることを目的とした。また、近隣や友人による独居高齢者への現実的なサポートを見いだすことで、高齢者を取り巻く孤立の悪循環を打破するため、インフォーマルな他者のうち、「近隣」と「友人」の相違も明確にすることも目的とし、独居高齢者の孤立防止のための取組みも提言する。

### 2. 研究方法

#### (1) 研究の方法と構成

序章では独居高齢者の孤立や、サポートの結びつけ、ソーシャルサポート（以下 SS）に関する先行研究について述べ、研究の目的を示した。第1章では SS の定義を整理した。第2章では研究全体のリサーチクエスチョンと各調査研究の構成を示した。第3章では SS に関する論文を抽出し、近隣住民と

の相互関係や独居高齢者へのサポートに関する知見を分析した。第4章では、専門職から独居高齢者が抱える課題等について調査を行った。第5章では独居高齢女性18名のサポートの授受や頻度を調べた。第6章では、そのうちの4名の、親しい他者との関係や重要度の変容を調べた。終章では、それまでの知見を精査し提言にまとめた。

## (2)調査対象地域

高齢化や独居高齢者在住率が全国平均割合に近いP県Q市を対象地域とした。

## 3. 結論と今後の課題

### (1) 結論

#### 1) 近隣・友人・娘からのサポート

①独居高齢女性には近隣から日常的にゆるやかな情緒的サポートの提供があるが、健康な足腰が不可欠である。②商店等のスペースは外出する動機づけになり、孤立防止効果が可能で、③特に農村部では、住民同士のつながりが密で近隣には相談できず、近隣は独居高齢者を情緒的に支えるのに不向きである。④娘に相談する女性は娘が市内か県内市外に住む傾向があり、⑤友人とは互いに選考・信頼し合い、近くに住んでいないと娘には悩みを相談せず、特に市街地ではどんな悩みも友人に相談し、⑥独居になることで互いの訪問機会が増え、ポジティブな効果も期待できる。⑦サポート源の順位付けは、頻度よりも情緒的に頼っている度合いや愛情の影響が大きい。⑧温泉施設はゆったり話すのに適し、その孤立防止機能を行政は理解する必要がある。⑨近隣は日常的にゆるやかなサポートを期待できるが、互いに適度な距離を保持すべき。⑩何気なさこそがインフォーマルな社会資源の特徴で、⑪ゆるやかな情緒的サポートをする近隣と、悩みを打ち明けられる友人の両方のつながりを、個々に適した形のミックスが重要（「サポートミックス」と定義）で、⑫特に信頼している近隣は「近くに住む友人」に変容する（「友人化した近隣」と定義）。

#### 2) 罪と恥の意識と悪循環

①独居高齢者には、「サポートを活用することでそれまでの自分からの逸脱する」という「恥の意識」が働く可能性がある。②積極性を促すよりも恥の意識をとり除く必要がある。③高齢になると身体的に衰え、できない行動の増増加や行動範囲の縮小のためさらに消極的になる場合がある。④外出や他者との交流の減少で、さらに衰える悪循環に陥る危険性が増大する。⑤悪循環防止には誰でもサポートを活用していることを、専門職や親族が繰り返し伝え、罪や恥の意識を意図的に取り除くと同時に相互扶助の意識を共有する必要がある。

### (2) 提言

提言として、以下の7項目を挙げた。

①行政による公共の場でのスペースを確保とスーパーや商店への啓発。②行政による規模に適した温泉施設への補助の支給。③社協らによる、高齢者らが集える小規模な「場」を住民が開設できる仕組みづくり。④市町村による自治会・町内会への補助。⑤国によるワンコインサービスへの補助。⑥国土交通省による「貨客混載」対象地域限定の緩和。⑦関係者による高齢者の「罪や恥」といった「負」の面の理解。

### (3) 今後の課題

今後の課題は、SSの地域による差異や性差の比較検証、また娘の自己効用感・満足感や、近隣が情緒的サポートに不向きである点等について調べ、明確化することである。量的調査による結論の検証も重要である。

## 論文審査結果の要旨

### 1. 論文の内容

本論文は、増加が見込まれる独居高齢者の地域生活の課題について、近隣等の相互の支え合いや地域資源のあり方を軸に考究した内容である。地域におけるインフォーマルサポートやネットワークに視点を当て、先行研究を緻密に読み込むとともに、地域における独居高齢女性ヘインタビュー調査を基盤に検討を行なった。調査では、近隣・友人とのつながりの保持が強いと考えられる女性（高齢）を対象に生活や他者関係を詳細に把握する中で、インフォーマルなサポート源との接触頻度や孤独の発生プロセスを踏まえながら、コンボイモデル、ライフイベントといった切り口から丁寧な分析を実施した。他者とのつながりや、「近隣」と「友人」の相違等にも着目しながら、その実態と要因を明確化し、文献研究と調査結果の質的分析から総括し、結論として独居高齢者の孤立防止のために、国や地域に求められる取組みを提言した。

### 2. 評価

独居高齢者が増加する中で、孤独死防止や支え合いの関係性の向上に寄与できる重要でタイムリーな研究であると考えられた。また、類似する研究テーマでは量的研究が多い中で、独居高齢者の生活形態と孤独という心理的側面について、それらの実態とプロセスを丁寧に分析した点で重要な論文であると捉えられた。把握されたデータの分析については、詳細な図解化（可視化）を試み、概念化されたコンボイモデルやライフイベント等の観点も導入したことも特徴として評価された。

しかし、以上の各章の綿密な研究成果や特徴等が、終章における結論では総合的考察には活かされておらず、記述が不十分と考えられた。またこの影響から、最後に掲げた国や地域に求められる現実的で詳細な取組みの提言が本論文の到達点としては結びつきにくいとみなされた。今後提言を具現化可能な内容として掲げるためにも、総合的考察の十分な記述が求められた。

### 3. 口頭発表（公聴会）ならびに口頭試問の評価

公聴会における発表では、論文内容を明瞭に表現し、時間通りの報告であった。質問にも的確に回答されていたが質的分析の信頼性についてはやや不明確な回答に留まった。その後、専門委員会の口頭試問において、質的手法の課題と研究のオリジナリティ、また結論が不十分なまま、提言が羅列されて終わっている点等が指摘された。一部簡潔さに欠けた不明確な回答のため、応答に時間を要したが、質疑の意味は理解された。この他、断定的な文章表現、句読点や繰り返しの多い表現等の指摘がなされ、加筆および修正ポイントが確認され、これらの修正がなされた場合、本論文は博士論文として一定の水準に達していると、審査担当教員が全員一致で合格と判定した。

### 4. 審査結果

審査委員全員一致により、本論文は博士論文に値するものとされ、「合格」と評価された。